

“生きる”こと

身の回りに起こり、見・聞き・体験することを自分の考えだけを頼りに語ったとすると、そこには人の数だけの見方が提出されることになると思われれます。

そしてもしその事が自分の生活や生きる上に直接関わる問題であるときには、その話される内容や言葉には見た目のパフォーマンス以上にその内容の信憑性が問われることとなります。

世界の見方は様々であり、通常よく見よく聞く事々は多くの人に興味を持たれる内容に加工修正されて聞く側の元に届けられ、これはわたし自身行うことでもあります。

しかし、その様々の見方の信憑性を問い始めるとはなはだ難しい問題ばかりが噴出することになると考えられます。

何故ならその世界の“見方”の根底にはその人の“生き方”が横たわっており、信憑性とはそのものその生き方を問うところに掛かってくると思われるからです。

これは、私の見方の話ではありますが――

通常人は陽の光の下でものを見て「そのものを見た」と思います。しかしその見たものが一体どういうものであるのかを自分の感じたものだけを頼りに、他の人に伝達しようとする、そこには見た人の数だけの“見え方”が出てくることになります。

例えば「赤い色」を説明しようとするときそれがトマトの赤なのか、リンゴの赤なのか、はたまた椿の赤なのか、薔薇の赤なのか、夕日の赤なのか、朝陽の赤なのか、説明しようとする例えが変われば「赤い色」のイメージも変化して行くこととなります。

また、「赤い色」と云う固有の特徴を相手に伝えるためには、この「赤」と云う固有の特徴を列挙するのでは無く、「赤」を言い表すためには、別の色と対比させる必要があります。

：黄色の中で赤かったトマトは、同じ赤の中では、緑色のへたの部分しか見えなくなってしまう。

この様に、見ているものの信憑性を問うことは、見た目に見えていない部分を探り、明らかにして行く作業を行うこと、と云えるのではないかと思えます。

信憑性を辞書で引いてみると「人の言葉などに対する、信用できる度合。信頼性。」とあり、つまり信憑性とは受け取る側の「生き方」に直接影響力を持つ部分を指してそこを明らかにする必要性と見ることもできるのではないかと思えます。

通常人はこのような状況の中で「生きる」内容に関わって行くのであり、しかしこの「信憑性」を問いただしながら複雑多岐な日常を過ごすことはおおよそ常人の神経をすれば不可能であろう事が容易に想像が付く程困難を極めると思われます。

そのため人は互いの言葉に行き違いや勘違いといったすれ違いを感じながらも、一つ一つの信憑性には深く関わらないよう注意を払いながらも、日常の中ではそれが予想以上に積み重なり絡まり合い複雑化、悪化の道を辿ってやがてあらぬ誤解や偏見へと発展して行く―のがその実情ではないのかと思われます。

このコミュニケーションの複雑な様相は人の数が増えるほどにさらに複雑さを増しながら目には見えぬが日常のその足元に横たわっています。

ある人がいて別の人に好意を抱くと、人はこの複雑なものの見方の中から、あえて共通する「見え方」を探し、見つけ出しその人に近づきコミュニケーションを深めたいと望むしまた努力をします。

しかし事はそう思うようにはならない・・・
なぜなら、日常の足元に横たわるこの「見方」感じ方」には、他の影響を受けてもさして問題とはならない浅い層の部分もありますがその下には、他からの影響を受けぬように守られなければならない、その個人の中心に祀られた「生き方」という心の神聖な場所へと続く、切れ目のない繋がりが厳然とあるからです。

：もしそうでなかったら信憑性を問うことに大きな意味など無くなってしまうでしょうから。

コミュニケーションを深めて行くことは他でもなくこの“生き方”という神聖な場所へ向かって慎重に、降つてあるいは昇つて行く試みになるのではないかと思います。

この“生き方”とはその個人がその全人生の中から学ぶ世界観の現れでありそれはこの広い宇宙の中に、只自分だけに与えられる唯一の居場所である・・・と言い換えることもできるのではないかと思います。

人はこの神聖な場所で考え出す世界観を通して世界を見ていけると言えるのかも知れませんが、ここで視るものを通して生の営みは達成されて行くのかも知れません。

その人それぞれの“生き方”には、永らく自分自身により育み育ててきた“光”のごとき力が浸透して活動しており、人はこの“光”でものを照らして視ているのかも知れない。

つまり、信憑性とはこの部分を問題にするのではないのだろうか？

そこにある“光”にはどんな明るさがあるのか？と、問うているのではないのだろうか？

通常人は先にも述べた陽の光に照らされた自然界を見、照らされた陽に温もりを感じます。

このことは紛れもない事実です。

人が目を閉じてこの陽の光を感じるときそれが冷たい夜の明けるその瞬間であれば誰もが陽の光を有り難いものだと感じることでしょう。

しかし一旦目を開き、この陽に照らし出されたものを見ると、人はそれぞれに自分の“見方”でものを視ます。そしてその中に広がる世界は、誰一人共通することの無いその個人の歩みの中から育てられてきた明るさによって照らし出される。と考える事はでき無いのでしょうか。

そこには、自分にとっての心地よいものとそうでないものがあります。

そして、この心地よいものとそうでないものは当然万人に共通のものではありません。

この快と不快は“生き方”がこれまでに世界との関係の中で作りだしてきた、個人の色合いと考える事もできるのではないかと思えます。

“生きる”という問題は人にとっての最重要課題でありながら人はそのことについて語りたがりません。

できることならこのデリケートな難題に出くわし思い悩むより、上手く潜り抜ける道を探す方が遙かに合理的であるように考えます。

しかしどの道であってもその問題を放棄したり、逃れる道の無いことを思い知るまで“生きる”苦しみは容赦なくやってくる・・・

その苦しみが深いほどその問題を放棄することは、すなわち自分自身を放棄すること、と云う思いに至らされるのかも知れません。

何故“生きる”という問題がこれほど難しい問題になってしまっているのか―？

本来“生きる”という問題は、人にとって最も生き活きと語られるべき内容を持つ出来事であるべきではないのか？

：いや、人は“生きる”ということを誰もが生き活きと語りたいし語ろうと努力している。

そしてその努力の先に必ず光明が訪れると信じて…。

こうしてその努力を続けていくある時点で人は自分の見方がそもそも逆転していた事に気付くときがやってくるのかも知れない。

自分が陽の光の下に見ていたものとは実は自分の力によって見ていたものではない
…と云うことに。

それは陽の光が自ら発している、お日様そのものの無数の姿に他ならない…と云う
ことに。

自分が自然界に見ているものとは実は、ものの形や姿に変化して見えているお日様
の様子に過ぎない…ということに。

自分が見ていたものとはそのものの姿ではなく、そのものに反射した“光”の影絵
でしかなかったのだ。

このとき“光”は自分の内面を照らす“光”としてでは無く、自分の内面に果てし
なく広がる“闇”の世界を知らせるための認識の“光”として立ち現れるに違いない。

…自分は何も見てなんかいなかったのだ！

自分の“認識の光”はそのものを決して捉えてなんかいない…、

自分の力で視るためにはそのものに近づきそのものを手探り、温度や触感や臭いや
味や、自分の持てる能力の全てを投じ、感じる全てを通して、初めてそのものな
がしかを“視る”事が出来るのであり、その事により始めて自分の内面に広がる隠れ
た世界を照らす事ができるのだ…と。

視るという力は、この“自分を通す”事によってもたらされるのであり、自分はこ
の“認識”を通して人間として“生きる”のだ！

そしてこの時、混沌であった世界の姿は自分の思考を遙かに超え出たと云う意味に
おいて未知ではあるが、紛れもない実質を伴う現実の姿となって現れるに違いない。

こうして日常の中で混迷してしまっていると見えていた世界の中に見えない繋がり

が見えてくることだろう。

そしてそれは、相変わらず苦痛を伴うものであるのかも知れないが、そこには同時に苦痛の影に隠れた輝く姿も見いだされることだろう。

自分という人間に降りかかっていた出来事には真の構造があり、世界は自分に不幸をもたらしているのではなくその不幸と見ている自分を豊かにする実りがある中に隠れ潜むように用意されているのだ。

自分とは、この大宇宙の中に忽然と現れて意味もなく生きてまた同じように死んでいくだけの存在などでは決してなく“生きる”というこの自分という宇宙で唯一の素材を通して、この混沌と見えている一つ一つの出来事の中に隠れている宇宙の実質を見つけ出し、自己の闇の中に隠れている自分自身を照らし出す明かりを実らせ育てて行く機会をこうして賜っているのだ…

“今”

という思いになれる日がきつとやって来ると信じます。

2013年12月15日 再改訂

隠 太郎